

## 「命（ぬち） どう宝」

—わたしは命である—

ヨハネによる福音書 11章 25節、14章 6節

神谷 武宏

(沖縄バプテスト連盟普天間バプテスト教会牧師、  
付属緑ヶ丘保育園園長)

今年も6月23日「沖縄慰霊の日」を迎えます。恒久平和を特別に祈願する日ですが、この日は沖縄戦が終結した日ではもちろんありません。74年前、沖縄戦末期に第32軍司令官牛島満が自決した日（22日説あり）、組織的戦闘が終結した日になるわけです。その司令官は自決前に「各部隊は各地で最後まで敢闘し悠久の大義に生くべし」と玉碎命令を下したのでした。その命令により戦闘は8月15日を過ぎても続き、結局は9月7日の降状調印式まで長期化することになったのです。この玉碎命令がなければ死ななくてもよかった者がどれだけいたことでしょうか。沖縄戦の悔やみきれない悲劇が「6・23」には込められています。

沖縄では「戦後ゼロ年」という言葉があります。1945年の敗戦後に日本の戦争は終結しましたが、しかしここ沖縄では未だ戦争の悲劇が続いているのです。

2017年12月7日、その日私ども普天間バプテスト教会付属緑ヶ丘保育園では、来週末のクリスマス会のため、子どもたちは、聖誕劇、讃美歌の練習など、とても楽しみにしているクリスマスの準備をしていた最中にありました。午前10時20分ごろ、米軍CH53E大型輸送ヘリコプターの部品が屋根に落ちてきたのです。園庭には2歳、3歳児クラスの子どもたちが遊んでいて、突然ドーンという激しい音が園内に響きました。その音で振り返った保育士は、屋根の上で大きく跳ね上がる物体を見えています。その屋根の下は、1歳児クラスの部屋で今から園庭に出ようかとしている時でした。ドーンという衝撃音に1歳児クラスの幼い子どもたちは、「わーっ」と声を上げ、先生方も一緒に驚きました。その物体は軒先からわずか50センチのところで屋根の上で止まっていたのです。あと50センチずれていたらと思うと本当にぞっとします。6日後には近くの普天間第二小学校の運動場に同機ヘリの窓枠7.7キロのものが、体育

の授業していた児童がいるわずか 10 数メートル先のところに落下しました。その後も不時着事故 3 件、オスプレイからの部品 13 キロの落下事故と相次いでいます。2 年前（2016 年 4 月 28 日）には、元海兵隊に 20 歳の女性が強姦・殺害され、今年 4 月、またしても一人の女性が米兵に殺されました。この現状を戦後と呼べるでしょうか。「命どう宝」は沖縄の金言です。その金言に逆行する状況がどれ程の悲しみを生むことでしょうか。

今、沖縄の海が埋め立てられ軍事基地が造られようとしています。ジュゴンが泳ぐ海を、日本に生息する全種のクマノミが泳ぐ海を、毎年ウミガメが産卵する浜を埋め立て軍事基地が造られようとしています。毎日 200 台、300 台を超える土砂、資材を積んだトラックが辺野古キャンプ・シュワブゲートを出入りします。しかし、ただでは出入りさせません。きょうも早朝から人々が集結し座り込み、非暴力をもって命を守ろうと体を張っています。“諦めない” “命どう宝” を合言葉に、非暴力をもって排除されてもまた座り込む。1 日でも、1 時間でも工事を遅らせ、軍事基地を造らせないと座り込みを続けています。

沖縄の歴史、現状に向き合うことは日本人の責務と言えるでしょう。なぜなら、日本人の大多数が支持する政府の思惑により、沖縄の「命」が奪われ続けているからです。

「わたしは命である」(ヨハネ 11:25、14:6) とは、イエスの言葉です。「命」はイエスであると聖書は記しています。すなわち全ての命は、イエス・キリストに通ずるということであり、人の命の中に、被造物の命の中にキリストが居られるということです(ローマ 8:18~30)。そのように多くの人間が理解し、命の尊さを覚える時、私たちの世界から命が脅かされること、命が暴力によって奪われることは無くなるはずです。

「命」に向き合うことはイエスに向き合う事と言えるでしょう。きょうも沖縄でイエス(命)が死に追いやられています。「命」に向き合うことは私たちキリスト者の責務です。